隙間の国

土方一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
隙間の国

【Ｎコード】
Ｎ８７４８Ｚ

【作者名】
土方一

【あらすじ】
謎の選定が行われる様になって半年たった日本
皆、自分さえ選ばれなければ関心を向けなかった
そんなある日選ばれてしまった男、池田
彼の平穏は１日の内に崩れさる

1日目　選定

「間もなく選定が開始されます」

あぁ…今日も始まった

「…コスギユウヤ…東京都千代田区…」

テレビから聞こえて来る無機質な人の名前を読み上げる声、この中に自分の名が無いことを確認するのが俺の…いや、この国の国民の日課だ

とは言っても1日5人から10人しか呼ばれない、皆自分は呼ばれることは無いと当然の様に思ってる

半年ほど前から始まったこの放送、名前を呼ばれるとどうなるかは誰も知らない

始めは名前を呼ばれるとどうなるのか皆気にしていたが徐々に話題に登らなくなった

まぁ知り合いが呼ばれたと言う話は誰からも聞いたことないし自分が関わることもないだろう…

そういえばごく近所の住所が呼ばれた時はちょっとびびったな…

うちは近所付き合いが盛んな割には全然知らない名前だったけど

「…イケダ　マモル…」

……俺の名前！？
冗談だろ…同姓同名なだけのことを祈りつつ住所を確認したがどうやら俺のことの様だ…

これから何が起こるのか不安だかとりあえず会社に向かおう

「今日の放送で俺呼ばれちゃったんすよー」
出社して一番廊下にいた先輩に相談してみた

が、先輩は気づかなかったのかスッと自分の部署へ行ってしまった

名前を呼ばれてしまった意味はすぐに理解した

誰も俺の話を聞いてくれない…と言うより話しかけてることに気づいてくれない
俺を認識していないのだ

事態に戸惑いつつも俺は自分のデスクへと向かうがあるべき場所に俺のデスクが存在していなかった

よくよく見渡してみるとこの慣れ親しんだ部屋に俺に関わりのあるものは存在しなくなっていた

気が狂いそうだ…

とりあえず誰も気にすることもないだろうし一旦家で落ち着こう

自分の部屋が見えて来たとき俺は愕然とした…

俺が住んでいた部屋は空き部屋となっていた

それもさも今まで何年も誰も住んでいない様子のようだ

半狂乱になった俺は必死に自分の痕跡を探してみたが何一つ残ってはいなかった

俺の存在が無かったことにされたようだ

誰からも認識されず、存在が抹消され意識のみが残された俺はまるで幽霊の様だ…

絶望にうちひしがれ崩れ落ちるなか俺は一つの事実を思いだした

以前呼ばれた近所の人の名前は数年来の付き合いのある人物であったと言うことを…

1日目？　把握

今まで特別なことをしてきた訳じゃない

善行をしてきた訳じゃないけど悪行を働いた覚えもない…多分…

なぜ俺がこんな目に…

とりあえず状況を整理すると

・人から見えていない

・今までの生活の痕跡がない

・物には触れるからいつの間にか死んでた訳ではない

こんなとこだろうか

幽霊というよりは透明人間だな…

「イケダさんですか？」

うなだれてた顔を上げると知らないおっさんが俺の顔を覗いていた

「そうですけど、どちらさ…」

…あれっ？見えてるのか！？俺を？

「いやぁ、災難だったねぇ」

「俺の事が見えてるんですか？」

「あぁ、私も君と同じ境遇でね」
俺だけでは無かったのか…
少しの安堵と共に疑問も浮き出てきた
「何で俺の名前を？」
まぁまずはこの辺りだ
「私たちは毎朝の放送をチェックしてできるだけ新入りを迎えに行ってるんだ」
私たち？
「私たちと言うことは他にも？」
「あぁ、私のグループは５０名程で行動している。…おっと、私の名前はヤスダだ」
「俺たちみたいのが５０人も…」
「あの放送が始まって半年は経つんだ名簿に記してるだけでも千人は確認してるよ」
そう言えばそうだ、１日８人だとして１８０×８で１４００人程度いるわけだ…
「俺はどうなってしまったんですかね？」
まぁこれが一番気になるな…

「まぁ今の状況の通り、普通の人たちからは見えてないし以前の個人情報などは消滅している」
「それ以外の説明の出来る人間は仲間にはいないんだよ…いずれにせよ我々の常識から外れた出来事だ」

そこまで情報をもってるわけじゃないのか…
しかし同じ境遇の人間がいたと言うことは心強いな

「一人でも食うには困らないだろうが身の安全は守れないだろう、我々の所に来るといい」

「危険？何がですか？」

「君はインビジブルと言う映画は観たことあるかい？」

「ありますけど…透明人間が人を襲うやつですよね？　……！！」

「あぁ我々も透明人間のようなものだ」
「仲間かいるから私たちは孤独ではないが仲間ではない人間の中にはモラルを失った奴等もいる」

そうか…こちら側には警察も干渉できないのか…
確かにこの状況を利用しようとする輩もいるだろうな…

「確かに覗きや盗みもし放題ですしね」
俺がそう言うとヤスダさんは少しばつの悪い顔をした

「私たちも向こうの法律を全て守ってる訳ではないんをだ…」
「我々が独自に食料などを生産するのは難しいんだ…だから最低限

の必需品は拝借している」
確かに…食料を作るにはそれなりに土地がいる
管理の行き届いたこの国ではそんなもの確保できないだろうな
「しかしモラルのかけた行動は最低限にして秩序をもった組織を作るという考えを持つのが私達のリーダーなんだ」
なんか釈然としないな…
俺たちを認識できない奴等に気を使ってどうなるんだ
「何か釈然としないようだね」
「エッ…」
顔に出てたか…
「まぁ私も解るよ、私も始めはそうだった」
「我々はこちら側を隙間の世界と呼ぶのだが、そんな世界にルールを作ろうとしているリーダーの考えを聞けば共感出来ることも多いだろう」
「…話は聞きましょう、常にあなたたちと行動するかは解りませんが」
「聞きに来てくれるだけでも良かったよ。　あっ、そうそうリーダーの名前はシジマと言うんた」
シジマ…そいつがキーパーソンになるのだろうか……

1日目？　軌跡

ヤスダさんたちの本拠地に向かう道すがら俺はこれまでの人生を振り替えっていた

２４年前俺は地方の片田舎で池多　衛＞いけだ　まもる＜として生を受けた

小学生の頃は普通に暮らして中学生の頃は普通に過ごし高校も大学も普通

今の（とはいっても今日までだったが）会社に就職し営業をしてたが大した成果もあげていない

彼女もいたが先日別れ……

あれっ？俺って何にも無いな……ヤバい…泣きそうだ…

数時間前に無くした人生を惜しんで振り返ってみたものの、惜しむような経験も無駄になった努力も見当たらないのだ。失ったもなにもない…

数時間前になんとなくの喪失感に沈む自分を思い起こすと実に滑稽だな…

まぁ俺くらいの歳で何かを成し遂げた奴などそうそういないさ…と、そうでもないことも気づきつつ自分を納得させた

「ヤスダさんていくつなんすか？」

先程の思考を払拭するために話を振ってみました

「いやぁ今年で５３になるよ」

「へぇーお仕事は？」

「貿易の会社を経営してたんだけど、む……息子にノウハウ叩きこんで早々に経営を任せて隠居してたよ」

「息子さんそんなに俺と年変わんなそうっすね…」

「２２になったとこだったね…」

俺より年下で会社任されてたのかよ…ハァ…

「着いたよ」

郊外から離れ人気のない山道によくある潰れたラブホテルが本拠地だった

中に入るとちらほらと人を見かけたが中には怪我人もいた…やはり争うこともそれなりに見かけた

シジマの元へ向かう途中高校生位の子供が近寄ってきた

「ようやく帰ってきたかヤスダ」

ハァ！？なんだこのガキ目上の人間に対する言葉使いじゃないだろ！？

「そいつが新入りのイケダか？」

俺にもタメ口とは……礼儀教えてやろうか？

「そうだよシジマ君。ほらお互い挨拶しなきゃ」

……こいつがリーダー？

1日目？　襲撃

シジマ…この男…いや、クソガキか

他にもいい大人がいたようだけどこんなガキに率いられるなんてプライドはないのか

「志嶋（しじま）　撃（げき）だ」

「池田　衛だ」

まぁ自己紹介くらいは常識としてしておくか

「シジマ君はまだ17才なんだけどしっかりした考えを持っていてね、言葉使いは少し悪いけど頼りになる子なんだよ」

ヤスダさん、あんた情けないよ

こんなガキ頼りにしてどうするの？

「細身で非力そうだが…結構体力は必要だぞ、大丈夫か？」

このガキ…

「テメェさっきから誰に口聞いてんだよ！？こっちは年上だぞ」

「……」

何だんまりきめこんでんだ！？

「イケダ君…彼はちょっと特殊な環境で育っててね」

「志嶋総社って聞いたことある？この辺りで有力な会社なんだけど彼はそこの跡取りだったんだ、だから少し世間に疎くてね」

志嶋総社…かなりでかい会社だな

でもだからなんだよ

「そんなの関係ないでしょ！？こんなクソガキのいうこと聞けるかよ！！若造の息子にホイホイ会社受け渡すあんたには抵抗ないんだろうけどな！！」

「よせ！池田！！」

こいつまたっ…

「私の息子は消えたよ…」

「…っ？？」

「私の息子は私が選定された日に消えてしまった…私の起こした会社もね…」

「私は痕跡が消えただけたが息子は本人すら消えてしまったんだ…」

……そうか…少し考えればその可能性も……

そんなことにも気づかずに俺は傷口をえぐるようなことをベラベラと…

「だから若い子は息子の様に思えてね…私に免じてここは押さえて貰えないかな？」

「クッ…」

何も言えなくなり俺は逃げる様に部屋をでた…
これでは俺の方がヤスダさんより情けなくてシジマよりよっぽどガキだ…

一人離れタバコを吸っている俺はシジマの考えを聞けないままであるなんのために留まっているのだろう

考えを聞いて共に行動するか決めるとか偉そうなことを言っておいて自分から話を聞きに行くことも、ここを去って一人で行動することもできないでいる

かといってシジマから話に来てはくれないのだ…奴にはその必要がない

「イケ？」

声の方を振り向くと見知った顔があった

「ユウキさん…」

彼女は八尾（やお）　優季（ゆうき）近所に住んでた大学の先輩で俺より2ヶ月程先に選定され人だ
数時間前まで忘れてた顔で忘れる前には好意を抱いていた人…

「今日の朝イケの名前が呼ばれてびっくりしちゃったよ」

「ユウキさんもここにいたんだね…」

「私も家の前で途方に暮れてたらここの人に拾って貰ったんだ」

「私もって…まるで俺も途方にくれてたみたいじゃないか」

「まぁイケだからね」

お見通しか…

「なんか元気ないね、今のは冗談だよ」

「いや、違うよ…実はさっき…」

ユウキさんにさっきの出来事を話した

「うーん…言っちゃったのは仕方ないよ、だから今しなきゃいけないことをして先にすすんでってしてればそれがお詫びになるんじゃないかな？」

大学生の頃もこうして励ましてもらってたな…

「じゃあ私は少し仕事があるからまた後でね」

やっぱりみんなそれぞれ勤めを果たしてるんだな…

「ユウキさんはしっかりしてて凄いな…」

「私なんかまだまだだよ！」

「イケなんかもっとまだまだなんだから！…だから一緒に頑張ろうね！！」

以前のままの激励の仕方だ…なんか安心するな

ユウキさんと別れ、俺は気を入れ直してシジマの元へむかった

「シジマちょっといいか？お前の考えをってやつを聞かせて欲しいんだ」

「イケダか…分かった、私の考えを聞いて貰おう…そして賛同して貰えるのなら協力してほしい…」

そうだ…いくら若くても人がついてくるのならそれなりの人間なんだろう

「先ずは、我々の行動方針についてだが…」

「シジマさん！！カトウたちが襲撃に来ました！！」

入って来るなりなんだ？…エッ…襲撃とかあんの？

「何？人数は？」

「姿が確認できるだけで１２名です」

「奴等のことだ伏兵を用意してるだろう、今こちらの人数は？」

「建物内に１６名です」

「多数出払ってるとこを狙われたな…」
「シジマさん！人質を取られたようです」
「何！？誰だ」
「八尾です！」
「…！？ユウキさんが！？シジマ！どうすんだ？」
「ここは明け渡す訳にはいかん…最悪の場合、犠牲になって貰う」
犠牲に？ふざけるな…
「なんだよそれ！？てめえらそんなに寝床が大事かよ！？」
「それだけではない！ここにある物資を奪われれば奴等に好き勝手にやられる！それにここを明け渡したとこで特に女性など見逃してはくれない！お前と話してる暇は無い！」
「交渉して応じなければ応戦しろ！」
「解りました！」
畜生…ユウキさんが…
俺が助けだしてやる！！
「コズル！やつらの様子は！？」

「シジマ、奴等は鉄パイプや農具で武装している！交渉に応じる様子ではないな」

「交渉で少しでも時間を稼げば帰ってくる味方もいるだろう」

まだ少しは時間があるみたいだな

交渉が決裂する前に助け出す！！

「イケダ君！これを！！」

ヤスダさん！？

1日目？　作戦

ヤスダさんが手渡してきたものは拳銃だった

「これを君に渡しておくよ、素人が使っても狙い通りにはいかないが威嚇程度にはなるだろう」

こんなの渡されても…まだ棒切れの方がよくないか？人は殺したくないし…

「そこの棒切れで充分じゃないですか？」

「奴等は殺す気でくるぞ、それに君は顔が割れていない…手ぶらのふりをしてれば奴等は君を選定を受けていない人間だと思って油断するかもしれない」

その手があったか！ナイスだヤスダさん！！

「裏手はまだ敵が少ないそちらから八尾さんの後ろに回るんだ」

「解りました！」

とわ言ったものの裏には1人しか敵はいないが出ていけばバレてしまうな…

「おい新入り、ばれすにでるのは無理のようだな」

この人は確かコズルさん？

「おい、威嚇射撃だ」

「はい！」

コズルさんは別の人に正面にを狙わせて命令した

「おい、お前が合図をおくれ　でかい声で『あっ、ヤバい』と叫べ」

「…？分かりました…」

なんで？威嚇で俺の合図？まぁいいや

「あっ！ヤバい！！！」　パァーン

「！！！！！！！！」

俺の合図で正面の人と同時にコズルさんも発砲した…

裏手の敵は頭から血を流して倒れ初めて人が殺されるとこを見た俺はショックを受けた

死体を出来るだけ見ないようにしつつ、ここは治安の届かぬ場所だと言うことを認識させられ脱出は成功した…

初めて目の前で起きた殺人が味方に因るものだったのは悪い意味で意外だ…

殺されたのが味方じゃなくてよかった…秩序を謳う集団がこんな簡単に人を殺めて良いのか…

いろんな考えが巡るなか俺は正面の集団の背後までたどり着いた

「うーっ！寒い寒い」

俺は少し離れた場所て声を出し、敵の気を引いて立ち小便をした

奴等は「誰だ！」と叫んだが俺が無反応なのを見ると近づいては来なかった

俺のことを一般人だと思いこんだようだ

血気盛んな男たちは建物の方に集中しておりユウキさんを見張る者はいなかった

自分たちが有利だと思って油断しすぎだバカめ等

俺がユウキさんに近づいたのに気づいた味方が威嚇射撃をして注意を引く

その隙にユウキさんに近づきたどり着いた！

ユウキさんの拘束を外し後は事態に気づいた外出していた味方が待機しているであろう決められたポイントに合流する

「ユウキさん大丈夫？」

ユウキ

さんは頷き無事の確認はそこそこに解放を終えポイントに向かい始めたとこだった

「イケダ君危ない！！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8748z/

隙間の国

2011年12月28日02時47分発行